

なにごとによらず、自分の位置については、それを客観的に判断しにくい。自分では自覚していなくても、相手側の評価によって、自分の位置の思わぬ重要性に気づくことがある。

去る三月二十六日から三日間、山中湖で開かれた「日本外交国際セミナー」は、七〇年代の日本外交の諸問題を集中的に討議した、かなりオクタブの高い会議であったが、そこに参加した世界各国の代表たちのさまざまな意見を聞いていて、日本がいまや、よかれあしかれ、わ

シントンの懸念があったであろうことを、私自身、改めて考えさせられた。

今回の会議は、外交戦略の研究で名高いイギリスの戦略問題研究所が日本国際問題研究所と共催し、世界の十五カ国から約三十人が参加して開かれた。メンバーとして、欧米からは、ジョンソン政権の国務次官でアメリカの前国連大使ジョージ・ボール、ブルッキングス研究所のモートン・ハルベリン、ハーバード大学のエズラ・ボーゲル、「ル・モンド」紙論説主幹のミシ

● 外交時評

日本の力量

中嶋嶺雄(東京外語大学助教授)

れわれ日本人が感じている以上の大きな国際的存在として各国に意識されていることを、いまさらながらに痛感した。

私自身、ある程度の国際生活の経験もあり、また、この種の国際会議にもいくたびか参加してきたが、一九七二年の今日のふんい気は、これまでとはたしかにちがう。われわれ日本人はそれほど意識していないが、今回、ニクソン訪中による米中和解へのステップを刻ませた背景に、ソ連のアジアにおけるプレゼンスの増大とともに、日本の新たな台頭についての北京とワ



エル・タトウ、ソ連研究で名高いR・ローエン

タル(ベルリン自由大学)、周恩来と親しく、カナダの対中国政策の決定に影響をもつといわれるポール・リン(マギル大学)らが、戦略問題研究所のドシエヌ所長とともに参加し、アジアからはタナット・コーマン前タイ外相、シンガポールのゴ・ケン・スイ国防相、インドネシアのスジャトモコ前駐米大使らが参加した。

日本側からは宮沢喜一、大来佐武郎、佐伯喜一、渡辺弥栄司氏らの政財界の専門家や神谷不二、高坂正堯、力石定一、それに私を含む学者が出

席した。

今回の討議のなかで、とくに痛感したことの一つは次のことであった。日本の経済力が今日のように増大しつつあるからには、日本が将来核大国になるのが当然だという意見が、それについて賛否はともかく、この順序として、いわば自明のことのように一部の参加者から語られた。そしてこれにたいし、そのような日本の選択は、自明の前提どころか、もっともまづい選択であることの説明が、論理としてはともかく、心情においても、相手を十分に納得させることは、今日ではかなりむずかしいことになりつつあるということであった。

それほどまでに、日本にたいする諸外国の認識はぬきざしならぬものになりつつある。日本の現実をみていると、それほど大きな日本が感じられるのだろうかと思うのだが、世界は必ずしもそうはみていない。

かつて日本の力量がまだ小さかったころ、毛沢東主席は、日本がアジア諸国との経済関係をもっと拡大すべきだといって、日本を励ましてくれた。

つい先年はハーマン・カイン氏が、日本の将来の可能性を大変もちあげて、一部の日本人を喜ばせた。だが今日では、もはやだれもそのような美辞麗句で日本をおだてはしない。

ここに今日の日本をめぐる国際的諸問題の一端が映し出されていることはたしかである。